

タブノキ

8



〈しゅるい〉

クスノキか

〈にほんでのいいかた〉

タブノキ

〈なまえのゆらい〉

1. むかし、ちゅうごくごでまるきぶねをあらわす
『トンバイ』ということばがかわり、『タブノキ』になった。

2. むかしのほんにとうじょうするほどかみさまにかんけいして
て

『たましいがいる木』をいみする

タマノキからかわりタブノキになった

〈木のとくちょう〉

にほんのかいがんやしんりんとくにあたたかい

ばしょにはえる木である

木がおおいところでたかさ30mいじょうふとさ3.5mになる木もある。

せいちょうのスピードははやくおおきくなる。はっぱのうらは、

はいいろでわかばはあかいときがある。みはほとんど1cmで

まるい

〈つかいかた〉

イヌグス、クスタブともよばれクスノキよりもひいが、木はかたく

くいえのどだいやがつきにもつかわれていたりする。

タブノキ		和名	榊・榊の木		8
		別名	イヌグス、クスタブ		
分類	科(APG分類)	クスノキ科		属	タブノキ属
	科(旧分類)			属	
	科(旧分類)			属	
名前の由来	<ul style="list-style-type: none"> ・古代朝鮮語で丸木舟を表す「トンバイ」が転訛して→タブノキになった。 ・日本書紀に登場するほど神事に関連が深く、『霊(たま)が宿る木』を意味する「タマノキ」から転訛して→タブノキになった。 				
樹木の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・東北～関東の海岸寄り、中部地方から九州、沖縄の森林、特に暖地に生える樹木である。 ・常緑広葉樹、高木で30m以上、太さ3.5mに達する場合もある。成長のスピードは速く、株立ちで大きくなる。 ・葉は互生して枝先に集まる傾向があり、倒卵状長楕円形、全縁で葉先も円みがある。皮質で硬く、表面はつやがあって深緑色、裏面は灰白色。若葉は赤みを帯びる。 ・花期は4～6月、新緑の枝先の円錐花序に黄緑色であり目立たない両性花を咲かせる。 ・果実は径約1cm、球形の液果で、初めは淡緑色であるが、8～9月頃に黒紫色に熟す。果肉にエグ味はあるが、ムクドリなどが好んで食べて種を拡散する。 ・大木になるので、神社の鎮守の森に植えられことが多い。(神社を囲むようにうえられた森林) 				
用途・その他	<ul style="list-style-type: none"> ・イヌグス、クスタブとも呼ばれ、クスノキより低く見られがちであるが、材は硬く、建築の土台や鉄道の枕木にも使われた。 ・現在でも、家具、美術品の彫刻、楽器などに使われる有用な樹種である。 ・タブノキの樹皮ハタンニンを多く含むため、八丈島名産の『黄八丈』の染料として、また、漁網の染色にも使われた。 ・タブ粉(樹皮を粉にしたもの)は、蚊取り線香やお線香の粘結材として使われる。 				

